

主 題：成熟した信仰者を目指して②**聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章2－7節**

みことばを一緒に見ていく前に、きょうは皆さんに一つクイズがあります。人が休まずに走り続けた最長記録はいったいどれくらいでしょうか？一回も寝ずに、止まらずに走り続けた距離です。いったい何キロくらいでしょうか？私たちならどれくらい走れるでしょうか？答えは約563キロでした。2005年にディーン・カナーシスが、三日間寝ずに80時間以上走りました。ちなみにこの距離は大阪から福島県福島市までです。驚くことに彼のなした偉業はこれだけではありませんでした。彼は気温50度の中、デスバレーという砂漠を走り切ったこともあれば、マイナス40度の南極の中でフルマラソンを走ったこともあります。全米50州で52時間連続、50回フルマラソンを走ることも成し遂げました。いったいどうして彼は長時間走り続けることができたのでしょうか？レースを通して、疲れや痛み、怪我や苦しみを経験しながらも、いったい何が彼をここまで突き動かしたのでしょうか？ある時、インタビューを受けた彼はこのように答えていました。「自分の愛するものを追い求めることが私の原動力です。情熱に向かって人生を歩んでいる時、モチベーションは自然に与えられるのです」と。彼を突き動かし続けたものは、走ることへの愛と情熱でした。

私たちもみな信仰のレースを走っています。恵みによって、救われた者として、愛する主の姿に似ていく者として、成熟した信仰者となることを目指して歩んでいます。この地上にあってのレースは、決して楽なものではありません。途中にはいろいろな試練や困難があり、罪との戦いも日々経験します。いつまでも変わる事のない自分自身のかたくなさや罪深さを目にすれば、悲しみや失望も生まれ、あまりにもつらいので足を止めたくなる時もあるかもしれません。そのような時に、私たちを突き動かし続けるものは何でしょうか？それこそ私たちの持っている主に対する愛でした。私たちのような罪人を先に愛してくださった神様に対する愛や情熱が、私たちの足を一歩また一歩先へと進めるのです。

この朝も私たちは先週に引き続きⅠテモテ3章を通して、神様の描く成熟した者の姿、私たちが目標とする姿をみたいと思います。ここに描かれている姿は、今の自分からかけ離れているように感じるのですが、何度も何度もあるかもしれません。しかし、そのような時は、まず神様の愛に立ち返ってみてください。そして、その受けた愛、神様を見上げて、神様の愛に励まされ、力強められながら、ともに成熟を目指して走り続けていきましょう。

○神様の描く成熟した者の姿：15個の霊的特徴**Ⅰテモテ3：2－7**

「2ですから、監督はこう言う人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、3酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、4自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。5——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができでしょう——6また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。7また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

8. 酒飲みでないこと 3 a 節

では、さっそく神様が描く八つ目の成熟した者の姿、特徴から考えてみましょう。八つ目は、酒飲みでないことです。3節の初めに「酒飲みでなく」と書かれていました。「酒飲みでない」とは何を意味しているのでしょうか？これはお酒に支配されていない人のことを表しています。「酒飲みでない人」というの

はその生活がお酒によって特徴づけられない人のことを言いました。聖書はお酒が持っている危険について、いろいろなことを私たちに教えてくれています。たとえば、お酒の持っている危険の一つは、お酒が人の思考、判断を鈍らせてしまうことでした。このようなことばがホセア書 4：11 にも述べられています。「ぶどう酒と新しいぶどう酒は思慮を失わせる。」と。聖書は、「お酒が人の考える力に悪影響を及ぼします」と、「正しく物事を判断する能力を失わせます」と警告していました。

そして、これは聖書の中だけでなく、世の中を見渡せばよくわかります。世の中を見れば、酔った結果引き起こされた多くの悲劇を見て取ることができるのです。飲酒運転をして起こった事故、そのような悲しいことも頻繁に起こっています。酔った人の軽率な発言や感情的な行動によって、だれかとの間にひびが入ってしまうこともあります。酒に酔って、考える力、思慮を失ってしまえば、ほかの人との間にもいろいろな問題は起こるのです。でもそれだけではありません。酒に酔えば、人との関係が壊れる可能性を持っているだけではなく、神様との間にも大きな問題が起こるようになりました。預言者イザヤはかつてのイスラエルの民の問題をイザヤ 2：11－12 にこのように書いています。「：11 ああ。朝早くから強い酒を追ひ求め、夜をふかして、ぶどう酒をあおっている者たち。：12 彼らの酒宴には、立琴と十弦の琴、タンバリンと笛とぶどう酒がある。彼らは、【主】のみわざを見向きもせず、御手のなされたことを見もしない。」と。酒に酔っていた彼らの問題は、彼らが主を見ようとしなかったことでした。お酒に酔えば、正しい考えや判断ができなくなるだけでなく、何よりも私たちが目を留めているべき神様を忘れさせてしまうと言うのです。だからこそ、聖書はお酒が危険なものであると繰り返し教えていました。

もう一つ挙げるならば、お酒の危険は人を虜にしてしまうことでした。これも私たちは聖書の中を見ずともまわりを見渡せば、そういったものがあふれています。最初は少しの量で満足していたかもしれませんが、しかし、飲んでいる間は楽しい気持ちになれる、嫌なことを忘れられる、ストレスがなくなるなど徐々に飲む量が増えていき、そして、気づけば虜になっている人たちは数多くいます。いつの間にかお酒がなくては不安になり、やっていくことができないと自分の歩みをお酒に支配されている人たちはたくさんいます。私たちの思考、判断を鈍らせて、何よりも神様から私たちの目を奪わせる危険なものの奴隷になってしまっているのです。だからこそ、みことばは成熟を目指しているすべての信仰者に対して、神様だけを唯一の主人として、新しく造り変えられたのであれば、それにふさわしく生きていきなさいと明白に求めていました。

エペソ 5：17－18 にもこのように書いていました。「：17 ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。：18 また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」と。私たちはこのような者として、少しずつでも成長しているのでしょうか？まわりの人が私たちの歩みを見る時、お酒に支配されている酒飲みの人として私たちのことを見ないのでしょうか？もしかすると多くの人は言うかもしれませんが、「この点において、私は大丈夫です」と。それはすばらしい感謝なことですが、お酒は大丈夫かもしれませんが、でもほかのものならどうでしょうか？神様以外のもので、いつの間にか自分の主人になっているものはないのでしょうか？私はこれがないと困ります、不安になります、やっていくことができませんと、気づけば求めている自分の心を虜にしているものはないのでしょうか？もし私たちの心を愛する神様に向けるのではなく、神様から遠ざけるものが何かあるのなら成熟を目指す者として、それから離れることはとても大切なことでした。神様に買い取られた者として、お酒を含めてほかのどのようなものであっても、それに支配されない人物が、成熟した信仰者の姿でした。それが神様の描く八つ目の特徴でした。

9. 暴力をふるわないこと 3 b 節

10. 温和であること 3 c 節

次に九つ目と 10 個目の特徴です。二つはとても密接に結びついているのでまとめたいと思います。暴力をふるわないことと温和であることです。続きに「酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で」と書いて

いました。「暴力をふるう人」とは、自分の抱く怒りをさまざまな形で表す人のことです。自分の思いどおりにならなければ、人や物に当たり、時にはことばを用いて自分の怒りを表現する人物でした。ロバート・ジョーンズ先生もこのようなことばで説明しています。「(怒りとは) 自分にとって『それは間違っている』と感じる出来事に対して湧き上がる、心や魂の燃えるような不快感です。また、その間違いに、正当な報復や報いを求めようとします。…怒る人は、自分に不当なことをした、あるいは害を及ぼすと感じた相手に対して、考えや思い、感情、言葉や行動など、その人の全てでもって応答するのです。」と。「暴力をふるう人」の私たちのイメージは、すぐに身体的なことを思い浮かべるかもしれませんが、しかし、この人は怒りを持っているからこそ、考えや思い、感情やことば、行動などいろいろな形で自分のフラストレーションをぶつける者のことでした。「暴力をふるわない」とは、そのような人ではないことです。

▶「温和である」

そして、「暴力をふるう」の正反対に位置するのが、後者の「温和である」と言うことでした。「温和である」と聞くと、ただ優しい人を思い浮かべるかもしれませんが、これにはとても興味深いことばが使われていました。「温和である」ということばは、もともと律法における細かな権利をことごとく主張しない態度を表しました。そして、ここから寛大さや忍耐深さ、優しさを表すことばとして用いられました。「温和である」人物は、最初に寛大だということです。自分の権利を主張しないことです。ひとりの先生もこのことばに関して、次のような説明をしていました。「温和な人とは、譲る心を持ち、墮落した人間の弱さや無知に対して忍耐深く接することのできる人です。そのような人は、他人から不当な扱いを受けても同じように仕返しすることを拒み、細かな律法の規定や自分の権利を執拗に主張しようとしません。」と。温和な人はだれかから不当に扱われて、たとえ自分の権利を主張できる場面であっても自ら忍耐をもって、相手に親切に接する人のことでした。

「暴力をふるわない」と「温和である」を少し考えてみてください。私たちは小さい子どもたちの間でもその光景は見て取ることができます。大切なおもちゃを奪われたら、自分が並んでいた列に割り込まれたら、子どもたちもいろいろな方法で自分たちの怒りや不満を表します。泣き叫んで、自分のものを取り返そうとします。突き飛ばして、自分の場所を取り戻そうとします。だれかに奪われた自分の権利を子どもながらに主張するのです。大人になっていけば、あからさまにこのようにやり返すことはしません。けれども、私たちが絶対に間違っているという扱いを人から受ける時、より巧妙な形で私たちは自分の権利を主張するのです。たとえば、家族から冷たく扱われれば、自分も口を聞かずに冷たい態度をとっても問題ないと。相手が先にしたから、その権利が自分にもあると考えることもあります。友だちや兄弟姉妹からいろいろな傷を受ければ、自分も怒りや不満、憤りを覚えて、陰口を流しても、そのような人と距離を取っても問題ありません。私よりも先に相手がやったから、私はその権利を持っていると考えるのです。そして、私たちの目には自分の権利を主張することが正当に思える場面にも見えたりします。

しかし、その場面において「温和な人」は、その権利を自ら横に置いて、相手に寛大さを示す人だということです。憤るのが当然に思える場面において、自ら進んで寛大さを示そうとし、苦い思いを抱くことが当然に思える場面において、進んであわれみを示そうとし、受けた傷と同じ傷を味わわせるのが当然に思える場面にあっても、「いや、それはしない」と赦しや優しさを進んで示そうとするのです。しかし、これが私たちにとって難しいことのひとつでもあります。どうして私たちは自分が主張できる権利を自ら横に置いて、相手に値しないものを喜んで差し出そうとするのでしょうか？それは、私たちが成熟を目指しているイエス様がまさにそのことをなされたお方だからでした。その方の愛を知ったから、私たちはその方の愛や温和さに倣っていかうとするのです。

たとえば、イエス様が十字架にかけられていた時のことを覚えていますか？罪も全くない無実のイエス様を十字架につけた者がまわりを囲んで、通りすがりの人たちがひどい罵声を浴びせる中において、イエス様はひとり祈っていました。ルカ 23：34にこのように書いています。「そのとき、イエスはこう

言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。……」と。イエス様が口にしていたことは、自分の正しさを主張することでも敵を憎むことばでもありませんでした。それを主張する権利はありました。正しいお方だったのです。しかし、自分が受けた不当な扱いや仕打ちに対して、ふさわしい報いがその人たちの上に下るように願うこともしませんでした。権利がなかったわけではありません、権利は持っていました。しかし、この方は忍耐を持って、救い主としての働きを成し遂げるために、苦しみ、耐え忍び、そして、喜んでその者たちを赦すようにと祈っていました。私たちはこの方の温和さによって、罪を赦された者として、この点においてどのように成長していこうとしているでしょうか？心に怒りを抱えて、自分の権利を常に主張するのではなくて、どのような相手にも寛大さを持って、親切に接する人物が成熟した信仰者の姿でした。それが神様の描く九つ目と10個目の特徴でした。

11. 争わないこと 3d節

次に、11個目の特徴は、争わないことです。続きに書いていました。「争わず」とは何を意味しているのでしょうか？容易に想像できるかもしれませんが、「争わず」と言うことばには、文字どおり争いに反対するや平和を好むという意味が含まれていました。「争わない」とは争いに反対するという意味だけではなく、平和を好むという意味が含まれていました。要するに、「争わない人」とは人との争いや戦いを避けて、どのような時も平和を築くことを追い求める人物のことを言ったのです。ひとりの聖書注解者もこのような説明を残していました。「争い好きな人とは、言葉でも（場合によっては肉体でも）戦うことを好む人物です。論争好きで、貪欲で、けんか腰です。しかし、パウロが教会のリーダーに求めたのは、あらゆる脅しや争いを拒む、平和を愛する態度でした。」と。私たち自身は平和を愛する者として、少しずつでも日々を歩んでいるでしょうか？みことばは、霊的なリーダーにも、すべての信仰者にもそうです。このような姿を目指すようにと繰り返し訴えていました。箴言20：3に「争いを避けることは人の誉れ、愚か者はみな争いを引き起こす。」と書いています。

イエス様もマタイ5：9でこのように言われていました。「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」と。勘違いをしてほしくないのは、平和のためであれば真理を妥協しても良いという話ではありません。波風を立てないようにするためや輪を乱さないために、心では不満をくすぶらせながら、ひたすら我慢したらいいという話ではありません。私たちが目指している平和は、常に神様の真理に基づくものでした。私たちがキリストにあって神様との平和を与えられた者であるならば、その平和を感謝しながら、どのような相手にも争いではなく平和を求めようとするのです。それこそが成熟した信仰者の姿でした。それが神様の描く11個目の特徴でした。

12. 金銭に無欲であること 3e節

次に、12個目の特徴は、金銭に無欲であることです。続きに「争わず、金銭に無欲で」と書かれていました。

▶金銭に無欲

もともと「銀貨」と「愛する」の二つのことばからできています。それに否定語がついているのです。したがって、そのまま訳すなら「銀貨を愛さない」と訳すこともできました。「銀貨を愛さない」とは、つまり「金銭に無欲な人」、「金銭を愛さない人」のことです。「お金を愛していない」、「お金に関して貪欲ではない」人物のことを言いました。少し考えてみてください。どうして成熟を目指している私たちにとって、「お金を愛する」ことは問題になるのでしょうか？いろいろな理由を挙げることができます。たとえば、お金への愛と神様への愛は共存できないからです。イエス様がマタイ6：24でこのようにはっきりとされています。「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」と。ご存じのとおり、世の中では多くの人たちが仕事を掛け持ちしています。異なる仕事場や異

なる上司の下で働くことがある意味普通になっています。しかし、信仰生活のパートタイムは存在しません。私たちの礼拝を生み出す心が、もし富に対する愛に向けられているとしたら、その心から「神様を愛する愛」はすでに締め出されているということです。「お金を愛する愛」と「神様を愛する愛」は共存することができないから、成熟を目指す私たちにとって、お金を愛することは問題でした。

しかし、それだけではありません、「お金への愛は」すべての悪の根源でもありました。パウロが「お金を愛する」ことの危険性をⅠテモテ6：10でこのように述べています。「**金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。**」と。みことばはお金自体が悪だとは教えていません。私たちは、神様から託されているお金で生活に必要なものを買うことも、家族を養うこともできます。しかし、お金の虜になって、何よりもお金を求めることが原因で、妬みや不安、心配や貪欲、むさぼりというさまざまな罪へとつながっていくのです。そして、もう一つ挙げれば、「お金を愛する愛」は、「満足する心」や「神様を信頼する心」とは相反するものだということです。ヘブルの著者も次のようなことばを記していました。ヘブル13：5でこのように書いています。「**金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」**」と。

かつて莫大な富を築いた石油王ジョン・ロック・フェラーがこのような質問をされました。「人が幸せになるためにはどれほどのお金が必要ですか」と。それに対して彼はこう答えます。「あともう1ドルあればいい」と。「金銭への愛」は、あともう少しだけお金があれば幸せになれるとか、あとこれだけ蓄えがあれば安心して生活できると人に思い込ませようとしています。しかし、残念ながらそのような幸せや安心が訪れることはありません。消えてしまうような儚いお金を求めれば求めるほど、逆に満たされることのない不満足が、いつまでも心のうちに生み出されるようになるのです。だからこそ、私たちはみな「金銭を愛さない者」として歩んでいくことが重要でした。だからこそ、ヘブルの著者は「**金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。**」と言っていたのです。私たちは何を愛していて、何に本当の満足を見いだそうとしているのでしょうか？神様は約束してくださいました。「私たちを離れません、私たちを捨てません」と。その変わらない神様の約束に信頼する者として、神様のうちに満足を見いだす者として歩み続ける人が成熟した信仰者の姿でした。それが神様の描く12個目の特徴でした。

13. 自分の家庭をよく治めること 4-5節

次に、13個目の特徴は、自分の家庭をよく治めることです。続きに「**4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。5——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——**」と書かれていました。

▶「よく治める」「世話をする」

何を意味しているか理解する上で、注目してほしいことばが二つ使われています。一つは4節に出てきていた「家庭をよく治める」ということばです。「治める」ということばには「先頭に立つ」とか「前に出る」という意味が含まれていました。そこからリーダーとして前に立って先導する姿を描くものでした。そして、もう一つは5節の最後のところに「**神の教会の世話をする**」と出てきました。「世話をする」ということばは、愛や犠牲を払って相手の必要を満たそうとする姿を描くものでした。この二つのことばを合わせると、聖書が求めている家庭のリーダーの姿を読み取ることができるのです。自分の家庭をよく治める人物は、家族の先頭に立って導いていくだけでなく、愛と犠牲を払って、家族を世話しようとする人でした。家庭の霊的リーダー、特に父親は「導いていく力」と「世話をしていく愛」を働かせながら、家族を導いていこうとするのです。

そして、その働きを忠実になしていけば、ある姿が家庭のうちに見られるようになります。その姿は、親に対する子どもの従順さでした。威厳を持って、導いていく親に対して子どもは従順に従おうとするのです。4節に「**子どもを従わせている**」ということばも出てきました。「従っている状態」とは、自分

がすべてを決めてコントロールを握ろうとするのではなく、立てられている権威のもとに従順に身を置いている状態のことを言いました。残念ながら、これと反対のことは私たちのまわりであふれています。親が話している中にあって、「子どもがこうしたがっているから」や「子どもがこう言っているから」、「子どもがこれを欲しがっているから」と、親ではなく子どもが家庭の中心になって、コントロールを握っているような状況が今の世の中ではあふれています。

しかし、みことばはそうではないと言うのです。家庭にあって主導権を握っているのは常に親でした。そして、みことばをもって愛のうちに導いていくのは、父親に与えられた神様からの特権であり、責任でした。エペソ6：4にもこう書いています。「父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。」と。ウィリアム・ヘンドリックセン先生もこのようなことばを残しています。「父親が権威を用いる場合であっても、その権威は『真の威厳』をもって示されなければなりません。すなわち、父親の揺るがない態度が子どもに従うことが賢明だと思わせ、父親の知恵が子どもに従うことが自然だと感じさせ、父親の愛が子どもに従うことが喜びだと思わせるような形で、それは為されなければならないのです。」と。この世に、完璧で罪のない子どもはいません。どれだけ可愛くて、無邪気であっても子どもはみな生まれながらに罪人です。仮に最高のクリスチャンの父親や母親がいたとしても、そのような親もみな生まれながらに罪人です。だからこそ、子育てにおいては失敗や弱さ、罪の問題も絶えず出てきます。しかし、その中にあって、みことばに立ち、子どもと向き合って、子どもが喜んで従うことができるようにと愛情を持って導こうとする人物が、成熟した信仰者の姿でした。だからこそ、特に子どもを持っている両親の皆さん、父親の皆さん、だれかが家の中を覗くのであれば、そこにはどのような光景が広がっているのでしょうか？子どもが主導権を握っているような姿でしょうか？それとも、父親が導く力と世話する愛をもって、リードしている姿でしょうか？自分の家庭をよく治めることが、神様の描く13個目の特徴でした。

14. 高慢でないこと 6節

次に、14個目の特徴は、高慢でないことです。6節にこのように続いていました。「また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」と。パウロはここで教会のリーダーとなる存在が、「信者になったばかりの人」でないこと、言い換えれば「救われたばかりの霊的に未熟な者」でないことを求めています。理由がはっきりと後半に書いていました。「高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」と。理由は「高慢にならないため」でした。どうして教会のリーダーに、「霊的に未熟な者」を立てることが許されないかは、その人物がただ単にみことばを知らないとか、上手に語るができないことではありません。それは、「霊的な幼子」、自分自身の罪深さや敵の狡猾さも知らない未熟な者は、プライドの罪に陥りやすいと言うのです。ここで特に注目してほしいのが「高慢になって」と訳されていたことばです。

▶高慢になって

語源には煙、スモークの意味がありました。とてもわかりやすい描写です。もくもくと立ち上っている白い煙の中に置かれたらどうなるのでしょうか？私たちはまわりがよく見えなくなります。自分がどこにいるかさえわからなくなってしまいます。「高慢な人」というのは、多くの場合、自分が高慢になっていることに気づきません。なぜならプライドの煙によって、現実が見えなくなっているから、自分の考えや思い、自分の立場ややり方を実際よりも過大評価しているのです。プライドは、まるで煙に覆われている人のように、現実が見えなくなっているから気づくことが難しいのです。しかし、さらに厄介なのは、自分のうちにある高慢さは煙で見えないのに、ほかの人の高慢さには容易に気づくのです。このようなことばをC・S・ルイスも残していました。「これほど人から嫌われながらも、自分では気付にくい罪はありません。しかも、自分のうちにその罪を抱えていればいるほど、他人の内にあるものに、更なる嫌悪感を抱くのです。」と。

思い出して見てください。高慢さのゆえに、サタンは自らに滅びを招きました。高慢さのゆえに、かつての王様たち、ネブカデネザル王様やウジヤ王様もさばかれました。高慢さには常に大きな結果が伴ってきたのです。箴言 16 : 18 に「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。」と書かれていました。高慢な者の一歩先には「破滅」や「倒れ」がありました。ですから、教会のリーダーだけではありません。すべての信仰者にとって、へりくだった者として成長していくことは欠かせないことでした。

果たして、この点において私たちは少しずつでも成長しているでしょうか？だれよりもご自分を低くして、罪人に進んで仕える者となったイエス様ご自身が言われていました。マルコ 10 : 44－45 でイエス様はこのように言います。「:44 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなものしめになりなさい。:45 人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と。文字どおり、一番である神の御子がしもべとなりました。そして、そのような救い主のへりくだった愛によって、私たちは罪を贖われて新しい者に造り変えられました。へりくだった謙遜の愛を知った者として、新しく生きていくことができるようになりました。感謝の応答として、どのように日々を歩んでいくのでしょうか？自分の罪深さを正しく覚えて、どのような時も主に倣ったへりくだった者として生きていくことが、成熟した信仰者の姿でした。それが神様の描く 14 個目の特徴でした。

16. 教会外の人にも評判が良いこと 7 節

そして、最後にもう一つ、15 個目の特徴は、教会外の人にも評判が良いことです。続きの 7 節にこのように書かれていました。「また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」と。ここで言っているポイントは明白でした。「教会外の人にも評判の良い人」とは、その生き方や姿がどこにあっても一貫している人物でした。どこにいても変わらないことです。日曜日に信仰者とともにいる時も、月曜日から土曜日まで未信者とともにいる時も歩み方が変わらないことです。この点、私たちはチャレンジを受けます。私たちはこのように日曜日になると、みなで集まって礼拝をささげます。同じみことばを読んで、同じ神様に心を留めて、賛美して、同じ神の家族に属している人たち、兄弟姉妹と交わることができます。それは私たちにとって感謝な特権です。しかし、教会での礼拝を終えて家に帰った後、月曜日から始まっていく 1 週間の仕事や学校、家事や子育て、地域の人たちとの時間は、どのようなものになっているのでしょうか？違う考えや価値観を持っている神様を知らない人たちの前にあって、私たちの姿も違うものになっていないでしょうか？私たちはまわりの人たちが、私たちの普段の歩みをよく見ていることを知っています。私たちが信じている信仰や持っているメッセージには全く賛同しないかもしれません。しかし、私たちの歩みを見た人たちが、尊敬や関心を抱くような生き方をあかし人である私たちががしている必要はありました。マタイ 5 : 14－16 でこのようにイエス様は言われていました。「:14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。:15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と。

ひとりの聖書注解者もこのような説明をしていました。「現代社会においてキリスト教が好意的に受け取られていない状況を考えれば、外部の人から良い評判を得ることは、一見、不可能に思えるかもしれない。しかし、この命令は、教会が不必要な非難を受けないために欠かせないものであった。というのも、未信者の世界は一般的に、キリスト者の高潔な生き方を尊んできた一方、告白する信仰と実際の生活が一致しないキリスト者に対しては、常に厳しい目を向けてきたからである。」と。あかしを立て続けているのはとても厳しいことです。しかし、もし私たちの持っている信仰と実際の生き方が常にずれているのであれば、それを見ている人たちは間違いなくそしりの声を上げるようになるでしょう。もっと言えば、私たちの語っている福音や私たちを変えることができるみことばの真理が疑われるようになってい

くでしょう。そして、そのようであれば、まさに神様を憎んでいる敵であるサタンの望みのままになるのです。だからこそ、私たちはみなこの世で神様のすばらしさをあかしする者として、「教会外の人にも評判の良い人」として生きていくことが重要でした。このような者として、少しずつでも成長しているのでしょうか？教会にいる時も、家や職場にある時も、学校にいる時も同じ人物でしょうか？それとも全く別の人物に変わってしまっているのでしょうか？神様を喜ばせる者として、その生き方がどこにおいても変わらない一貫している人物が成熟した信仰者の姿でした。それこそが神様の描いている15個目の特徴だったのです。

さて、15個目までを一緒に見ました。これらの姿を私たちは目指して走っています。信仰のレースを走っている皆さんの速度は、自分の思い描いているものとは違うかもしれません。なかなか変わらない自分自身の罪深さに打ちのめされることもあるでしょう。成長しない自分に対して、嫌気がさしてきて、足を緩めようかと思うこともあるかもしれません。また、このレースの過程にあって、直面する試練や困難は、自分の手に負えないものに思えるかもしれませんし、いろいろな誘惑によってレースの途中で目標から目を反らしてしまっている時もあるかもしれません。しかし、そのような時は忘れないでください。最初に見たカナーシスは走ることに、地上でのゴールテープを切ることに愛と情熱のために、大変なレースでも最後まで走り切りました。しかし、私たちは彼以上に最後まで走り切るための喜びや情熱を持っているはずです。私たちは最後に愛するイエス様にお会いするようになります。それだけではなく、イエス様は最後に待っているだけではなく、レースの過程にあっても、ともにいてくださって、かたくなに私たちのうちに働いて支え、そして変え続けてくれます。私たちは罪深くて、弱くてかたくなであったとしても、私たちのうちに働く恵みの力は圧倒的なものです。そして私たちに用意されている永遠の栄冠は、ことばで表すことができないすばらしいものです。だとしても諦めずに最後まで走り続けましょう。目標がわかっていない、目標がはっきりしないような走り方ではなくて、朽ちない冠を目指している者として、まずはきょうと先週、私たちが見た15個の中の一つでもいいです。一つでも自分で見て、自分の弱い部分を祈りながら、神様に信頼して、変えてくださることを心から祈りながら、少しでも成熟した者となることを目指して、そして何よりも主に対する愛と情熱に燃えて、主にお会いする時までともに走り切って行きましょう。